令和７年度　麻生区市民提案型協働事業　事業報告会　議事要旨

１　開催日時　令和８年３月２３日（月）１０時００分～１１時５０分
２　開催場所　麻生区役所４階第１会議室
３　出 席 者　［委　員］　俵委員長、小林委員、大和田委員、竹迫委員、小佐々委員
　　［事務局］　田島課長、森下課長補佐、渡部係長、田中、髙木、嶋田
４　傍 聴 者　１人
５　議　　事

【団体からの発表・質疑応答】
①ＮＰＯ法人ｃｏｎｎｅｃｔ　【所管課：企画課】

【講評・主な質疑応答】
（委員）
愛児園の人たちが参加できたのは良かったが、今回は愛児園だけを対象としたわけではなかったと思うので、広報は自分の方でも今後も協力したい。
今まで他の団体が担っていたことを NPO のほうで担っていくのは非常に価値のある活動なので、より多くの人に知ってもらえると良い。今回だけではなく、今後の活躍も期待している。

（委員）
不登校の子がいるとどうしたらよいか分からず家族で孤立することが多い。広報面の課題は検討いただくとしても、こうした活動を社会全体で支援していくことが必要。参加者の支援だけでなく、同じ方向性で活動している団体とのコラボレーションなど横の連携や、あるいは、経験した子どもたちが成長してサポーターとして戻ってくるような、継続した活動になっていくと良い。

（委員）
広報など課題はあったが、不登校の子などに寄り添った内容になるよう企画されたのは重要だったと思う。体験によって自己肯定感の向上、親同士で話すことでのカウンセリング効果も得られたと思う。
対象者について、今回は不登校に焦点を当てていたが、生活困窮やひとり親家庭など体験が得づらい家庭にも対象を広げていくのも今後検討しても良いかと感じた。広報的には不登校親の会、生活保護やひとり親家庭を対象とした市の学習支援事業の対象者や母子寡婦福祉協議会に向けた広報など対象を広げていくなど、今後の活動にも期待したい。

（委員）
　報告を聞いていて、事業の目的が多くあり、混在している印象を受けた。少なくとも４つの目的が同時に存在しているように見える。１つ目は体験格差の是正、２つ目は子どもの主体性・参画力の育成、３つ目は不登校や生きづらさを抱える子ども・親の共感やネットワークづくり、４つ目は農体験・自然体験を通じた人間力の回復。
　どれも一つ一つが「団体の柱」になり得るテーマであり、一つの事業に詰め込みすぎているのかもしれず、やっている皆さんは大変だっただろうと推察する。情報の受け手から見ると、「誰に、何を一番伝えたい事業なのか」が分かりづらかった可能性がある。
　来年度以降、自走を考えているのであれば、年度ごとにテーマを絞り、「今年はこれに挑戦する」という形にすると良いのではないか。また、実施団体のモチベーションが最も重要なので、企画する側が楽しめるかどうかを基準にして良いと思う。

（委員）
　参加者の声から、事業自体の満足度は非常に高いことが伝わってきた。途中から参加費を出しても良い、という声が参加者から出てきた点も良かったと思う。
　広報については、今後も続けるのであれば、今回の参加者の声や良かった点を前面に出し、「何か良いことがありそう」と思ってもらえるようにすると良い。

（団体）
　広報については、まさに悩ましい点だった。委員から具体的なサポートや広報ルートを挙げてもらえたことがありがたく思う。一つ一つ丁寧に実行していきたい。
　目的が混在している点については、団体内でも改めて話し合い、次年度はより進化した形に整理して挑戦したい。
　子どもたちが本当に喜んでくれたこと、親が幸せそうな子どもたちを見守る姿を見られたことが、団体として非常に豊かな経験だったので、改めて感謝している。

【団体からの発表・質疑応答】
②特定非営利活動法人岡上アグリ・リゾート　【所管課：企画課】

【講評・主な質疑応答】
（委員）
　３点質問があり、１つ目は農地保全とワインというテーマはよく伝わってきた。その中で、麻生区民はこの事業の中にどう関わっていると捉えているのか伺いたい。
　２つ目は、大学との連携についてゼミ単位での連携は比較的やりやすい。しかし、大学組織として地域と連携するのは非常に難しいと感じている。大学側のメリットをどう見いた

出しているか、ゼミを超えた連携や、大学組織との関係構築についての考えを伺いたい。
３つ目は、色々な活動をされていて、収支全体を見たときに、どこが今回の市民提案型協働事業に該当するのか教えてほしい。

（団体）
１つ目について、区民を巻き込んでいくときに、農地には色々な課題がある。農地は基本的に市民が自由に借りられない。農地を市民に開放するため、川崎市農地課と協力し、市民が農地を借りられる仕組みを整備した。
実は川崎市内では、日当たりが良く平らな農地は不足している一方で、日当たりが悪い・形が悪い土地は耕作放棄地になりやすい。しかし、そうした条件の悪い農地こそワイン用ブドウ栽培には適している。つまり、ワインでしか手を出せない農地がある。そうした農地を農地化し、市民に担い手として関わってもらう、イベントを通じて農業に触れてもらう、という形で区民を巻き込んでいきたい。
２つ目について、おっしゃる通り、ゼミ連携は簡単。組織連携は非常に時間がかかる。
実際、明治大学のように規模が大きい大学では学長決裁まで行くのは大変。その現実的な突破口は「人数」だと考えていて、学生が増えれば増えるほど大学として動かざるを得なくなる。今回のワインプロジェクトでは、明治大学で 200 人以上の学生が関与し、大学として関わらざるを得ない状況になった。その結果、来年度から大学の授業として正式に位置づけられる予定。
３つ目について、今回の協働事業費として支出したのは、明治大学農学部での農業指導に関する謝礼と和光大学でのデザイン授業に関する謝礼。それ以外の、福祉ワイナリー見学などについては、川崎市健康福祉局の就労体験制度の枠組みで実施し、本事業費からの支出はない。

（委員）
担い手の高齢化や若い世代の地域への関わりなどの課題を常に感じている。そうした中で、大学生が地域農業や地域づくりに関心を持つ機会を作ったことは、非常に意義深い。大学生同士が大学を超えて交流する機会も、通常ではなかなか得られない貴重な経験だと思う。
一方で、学生たちがこの事業を通して、何を学び、何を獲得したのかが、報告の中でやや見えにくかった。「この体験を通して学生がこう変わった」、「こういう力を得た」という点が入ると、より伝わるのではないかと感じた。
また、ワインというテーマ上、子どもが関わりにくい面はあるが、リース作りなど、子ども参加できる企画があったのは良かった。今後は、大学生より下の世代（子ども・中高生）にも農業に関心を持ってもらえるようなアプローチがあると良い。
報告の中で、イベントのキャパシティの制約があったという話があったため、マルシェな

どより多くの区民に区の魅力ある資源としてのワインに触れてもらえる発信方法も検討してほしい。

（団体）
酒税法などもあるため、出店については次年度も検討していきたい。大学生より下の世代について、ワイナリーというのがキャッチーで刺さった部分があり、そういう意味ではワインはツールだと考えている。ジュースはどうかとよく聞かれるが、ジュースは保健所の管轄になり、アルコールが混在しないかとより厳しい指導があるので簡単にできないが、いつかは取り組んでいきたい。
今後について、岡上を農業で世界一にしたいと考えていて、次年度は岡上小学校でワインの授業をする予定。

（委員）
大学生にとっては非常に良い学習プログラムだと感じた。ただし、この事業を「市民提案型協働事業」でやるメリットがどこにあるのかを探しながら聞いていた。行政（企画課）とどのような協働関係があったのか。地域（麻生区・岡上）の人たちがプロセスにどう関わっているのか、地域にとっての「利」は何なのかがやや見えにくかった。

（団体）
一番は地域の活性化。岡上といえば農業と言われるようにしたい。岡上ヌーヴォーのイベントでは学生と地域の皆さんが直接ふれあい、年間３００人以上来場いただいていて、こうした「場」をつくること自体が、地域への還元であり、協働事業の成果だと考えている。同規模のイベントがもっとできればとは考えている。
行政と一緒にやる最大の意味は「信頼」。チラシに行政名が入ること自体が信頼につながる。実際に、今回北海道・宮崎県のワイナリーが来場したが、それらは行政間連携があったからこそ、相手側の予算が動いた。

（委員）
アイデアや実行力、岡上愛をよく感じられた。イベントで大学生の様子を見るといきいきしていて、地域の人とやり取りすることを大事に思っていることが実感できた。事業を進める中でも色々なつながり、知識が増えていく。イベントのキャパシティについては、スペースの問題だけでなく仕掛け作りも必要かもしれず、またアイデアを膨らませて対応されていくのだろうと思った。

（団体）
都市農業については、川崎市としても取り組む必要がある課題だと思っている。若い人を

巻き込んでいくのはなかなか大変。今後も行政と協力してやっていきたい。

【団体からの発表・質疑応答】
③一般社団法人 Miraiall かわさき　【所管課：地域ケア推進課】

【講評・主な質疑応答】
（委員）
相談窓口を今後どのようにしていくか伺いたい。併せて、今回の事業では治療や啓発などさまざまな取組が紹介されていたため、市民提案型協働事業の費用としてはどの部分になるのか教えてほしい。

（団体）
相談窓口については、区単位で整備するのは難しいと考えている。川崎市と、女性の健康センターと連携し、国の補助金を活用した体制づくりが必要だと認識している。
また、婦人科医だけでなく、整骨院、マッサージ、在宅サロンなど、日常的に身体に関わる専門職が更年期の知識を持つことで、相談に対応できる場所を地域に増やしていく必要があると考えている。そうした地域人材を育てることで、身近な場所でケアできる体制を目指したい。
今回、市民提案型協働事業を今年度で一区切りとした理由は、麻生区単位では十分に当事者へ届かないと判断したためであり、来年度以降は市レベルの枠組みで相談窓口を増やしていく方向を考えている。
費用の使途としては、麻生総合病院の医師とつながれたことが最も大きかった。相談しやすい医師との関係ができ、区民が受診しやすくなった点に意義があったため、講師謝礼として活用した。また、イベントだけでは限界があることから、より多くの人に知ってもらう手段として冊子を発行し、ここに最も費用を充てた。その結果、更年期について区民に意識してもらうきっかけになったと考えている。

（委員）
調剤薬局を起点に地域の知見を広げている自治体の事例や、市民講座を実施している病院の取組もあるため、そうした動きを取りまとめていくのも重要なのかなと感じた。

（委員）
テーマは「女性の更年期ケア」が中心だが、タイトルは「更年期の未来」であり、将来的には男性の更年期も含め、男女を問わず考えていくテーマとして発展してほしい。今回の取組をきっかけに、性別を超えた理解につながることを期待する。

（委員）
成果として、受診につなげたこと、相談窓口の周知が進んだことは良かった。今回、関係機関とのつながりができたのであれば、調剤薬局で周知してもらうなど、今後も継続・深化させてほしい。

（委員）
イベントの中で相談ブースを設け、実際に 40 人近くが相談した点は素晴らしい。更年期を迎える世代は、職場で重要なポジションにいる女性が多いと感じている。企業や職場の管理職が、更年期について学び、理解を深める必要があると感じた。職場環境へのアプローチなど、今後の展開も楽しみにしている。

（提案団体）
本事業とは別の取組として、企業経営者向けの更年期セミナーに関わっている。町工場の経営者などから、「どうケアしていいか分からない」「どこにつなげばいいか分からない」という声が実際に出ている。市民提案型協働事業を起点に、こうした広がりが生まれていることに手応えを感じている。

（委員）
更年期というテーマは、対象者も多く、社会的な影響範囲も広い。今回の取組で、どんな困りごとがあるのかが明らかになったと感じた。一方で、対象が広く、相談先も広いと思うので、今後ターゲットを絞っていくのか、大きめにしていくかは検討が必要。パッと見て、「ここに相談すればいい」とスムーズに分かるようになれば良いと思った。

（提案団体）
更年期の問題をすべて病院に集約してしまうと、病院がパンクしてしまう。そのため、地域のケアが必要だと考えている。

【団体からの発表・質疑応答】
④一般社団法人サステナブルマップ　【所管課：企画課】

【講評・主な質疑応答】
（委員）
マインクラフトという観点よりも、地域の子どもたちを集めて、育てて、そこから次の活動につなげていくという戦略的な部分が興味深かった。今後もとても期待したい。
また、助成金の使い方として見たときに、参加費を払って参加しているお子さんたちがい

る中で、その一部を助成で軽減できている点について、良い費用の使い方だったのではないかと感じた。

この麻生区での事例が、今後ほかの地域にも広がっていくような形になると良いと感じた。全国的にも展開されるようなモデルになることを期待したい。

（提案団体）

今回の事業をもとに、すでに府中市のアフタースクールでの採用が決まっており、現在データを作成している。また、関係性の構築については、今回サポートに入ったのは、過去に実施した事業に参加して卒業していった子どもたちだった。連続的に続けていけば、誰かしら何かしらつながりができる。

費用については、来年度はマインクラフトのアカウント料が一気に値上がりする。参加者に負担してもらうしかない部分もあるが、それ以外でどう吸収できるかも課題と考えている。

（委員）

このような体験型プロジェクト全般に言えることだが、どうしても成果が主観的になりやすいという難しさがあると感じている。今回の取組についても、成果が出ていることはよく分かったが、一方で、それが主観的な評価として受け取られてしまう可能性もあると感じた。もし可能であれば、関わる前と後で、参加者の意識の変容などをアンケートで数値として示せると、活動の重みがさらに増すのではないかと感じた。

（提案団体）

アンケートは実施しており、家庭内での様子が変わった、急に話すようになったなど、行動の変化についてのデータは把握していた。今後は、それらを整理し、数値化したい。

（委員）

実施回数が当初の計画よりもかなり多くなっていた点から、子どもたちの熱量が非常に高い事業だと感じた。マインクラフトというゲームの創造性も素晴らしいと思ったが、それ以上に、最初の説明で触れられていた「正解のない問いに向き合い、合意形成をしていく」という場面が、とても貴重な体験になっていると感じた。

まちづくりという分野は、一見子どもがなかなか関わりづらい分野だが、それを楽しく、しかも熱中しながら取り組めている点は、本当にすばらしい取組だった。

（委員）

子どもたちが自分たちで決めていくという取組はとても良いと思った一方で、大人がどのように関わっていたのか、その関わり方自体も非常に重要な学びになるのではないかと

感じた。
　また、デジタルの取組だけでなく、今はないが過去には存在していた地域の DNA のようなもの、アナログな視点と組み合わせることで、より立体的に、年月を超えた地域理解につながるのではないかとも感じた。この事業ではない部分かもしれないが、来年度取り組む予定のことなどあれば教えてほしい。

（提案団体）
　マインクラフトの前にやっていたのが、まさにそのような取組で、実際に地域を歩き、地図に落とす活動をしていた。子どもたちはマインクラフトに没頭しているので、目線をどう散らしていくかが重要だと感じている。
　運営する中で一貫して大事にしているのは心理的安全性。学校でも塾でもない場所で、主体的に、自由に過ごして良いが、自分で選択しそれを周りと合意形成する必要がある。それが守れない、自分勝手な行動だけは認めていないが、それ以外は守るから一緒にやろうという話をしている。

（委員）
　行政のまちづくりはどうしても規模が大きくなり、子どもたちや多くの人の意見をどのように拾うかは常に課題だと感じている。その中で、今回の取組は、子どもたちの視点を見える形で示してくれる新しいアプローチだと感じた。
　一方で、継続して参加している子どもたちを大切にしながらも、より多くの子どもたちが関われる入口をどう作るのか、限られたメンバーだけで完結しない仕組みが必要になるのではないかと感じた。

（提案団体）
　今後はイベントや体験機会を増やすことで、より多くの子どもたちが関われる接点を作っていきたいと考えている。イベントでは体験を希望する子どもが非常に多く、長蛇の列ができることもあったので、来年度も取り組んでいきたい。

以上